

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

いま注目を集める、地域と高校の連携。この連載では、地域課題に取り組み、高校生はどう育つのか、また、学校はどのように地域と連携できるのかを探っていきます。

取材文／江森真矢子

地域との多彩な連携により 自立した札幌市民を育てる 「社会に近い、開かれた学校」

第3回 おおどおり 市立札幌大通高校(北海道・市立)



欲の育成をカリキュラムの核とする新しい学校だ。隣接する幼稚園と授業で連携し、校舎内の市民開放スペースでは市民と高校生が共に学ぶ。キャッチフレーズである「社会に近い高校」は地域社会に開かれた学校であると同時に、多様な背景をもつ生徒の円滑な社会への移行のため、豊富な社会体験やキャリア支援体制を整えた学校であるという意味をもつ。

開校時から 札幌市の課題解決を志向

2003年から市立高校改革をスタートした札幌市。8校の市立高校のなかで一番若い同校は、4校の定時制課程の再編・統合によって08年に開校した。設立準備段階からかわつてきた進路指導部部長の平野淳也先生は「市立高校の教員として他人事ではありませんでした。いわば勝手の連続的議論に加わり、知恵を出していたのです」という。

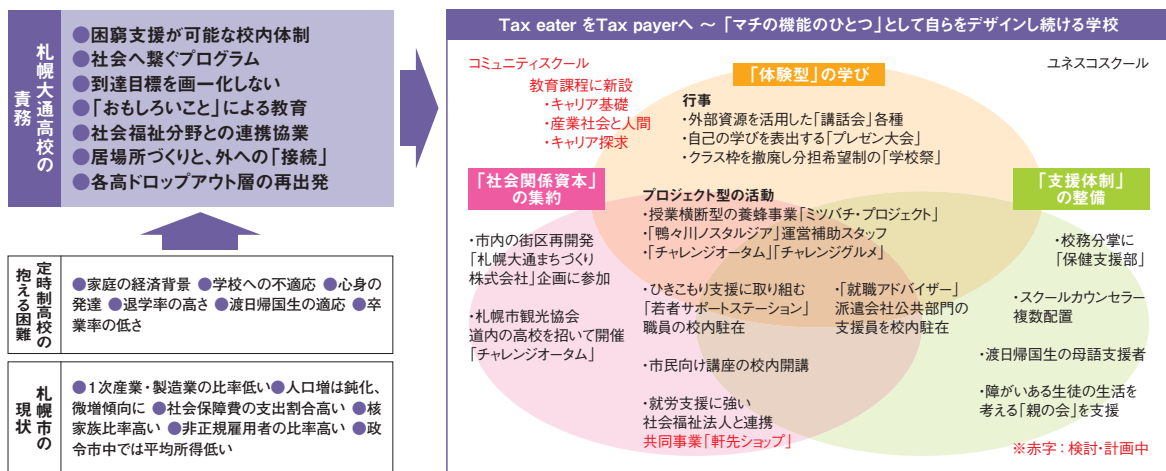
市立高校の存在意義は何か。社会保障費増や人口増の鈍化により逼迫する市の財政、高い非正規雇用者の

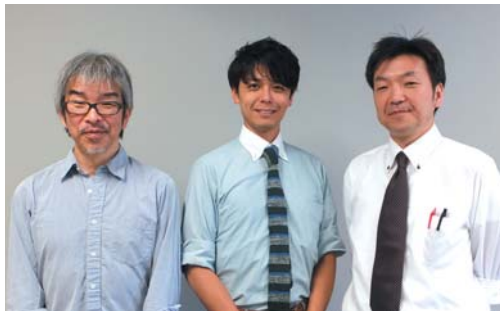
割合。そして、統合される定時制高校をみれば、高い中退率や学校への不応、厳しい家庭の経済的背景など支援が必要な生徒が目立つ。

「Tax eater を Tax payerへ」社会人として自立していける生徒を育てることが、市から負託された学校の責務。そう考えた同校は教育を通して市の課題を解決すべくデザインされている(図1)。

自立した市民を育てようとしても「困難を抱えている子どもたちに従来の教育をしては立ち行かない(平野先生)。まずは多様な生徒が共生して学べる環境づくりのため、カウンセラーや若者支援の専門家を校内に常駐させ、渡日帰国生や障がいをもつ生徒の支援体制を整えた。また、社会への円滑な橋渡しのため、まちづくり活動への参加やインターンシップなど質量共に豊かな社会体験を用意。さらに、学びへの意欲と自立への意志を育てるためには手厚く管理・保護するのではなく、自ら学びたくなるような授業や体験を通した学びを、と考えた。

図1 教育プログラムの開発背景と取り組み内容





写真左から
平野淳也先生(進路指導部部长)、西野功泰先生(商業・情報科)、蒲生崇之先生(キャリア教育推進部部长)

図2 ミツバチプロジェクト概要



◀中庭に設置された巣箱。イベントは近隣保育園の園児とともに施した。校内掲示やブログでの発信もあり、授業等でかかわらない生徒も日常的にミツバチプロジェクトに触れることができる



▲メディア局の生徒の運営するブログでは、プロジェクトのレポートのほか日々の学校の様子が綴られている。40人の生徒が参加するメディア局は、コミュニティFMでの情報発信や、校内掲示の作成、ブログでの発信等、学校運営の一機能を担っている。登校時間帯や履修授業の違う生徒も、情報を共有でき、プロジェクトの大きな支えとなっている。
URL : <http://odori-cc.net/>

教科横断で取り組む ミツバチプロジェクト

「『支援体制』の整備」、「『社会関係資本』の集約」、「『体験型』の学び」という同校の特徴すべてを兼ね備えているのがプロジェクト型の学習だ。住民有志が町の歴史をつなぎ地域を盛り上げようとはじめた「鴨々川ノスタルジア」プロジェクトではお年寄りからの聞き書きやガイドブックの制作に生徒が参加。また、大通地区の活性化や整備を行う札幌大通まちづくり株式会社や、実店舗を使って行う職業体験イベントにも企画から参加している。

地域と連携した活動はほかにも数多くあるが、校外連携のみならず校

内の複数教科も連携して取り組むのが「ミツバチプロジェクト」(図2)だ。同校の屋上庭園に蜜蜂の巣箱が登場したのは2012年。養蜂を通して生物を学び、商業科目で地元企業と連携してハチミツ商品を企画、芸術科ではラベルをデザインし、できた製品は市内イベントで生徒が販売実習。その過程では多くの地域団体とかわり、市民ボランティアも共に学ぶプロジェクトだ。

1000人を超える在校生のうちプロジェクトにかかわる生徒は200人程度だが、メディア局の生徒が運営するブログや校内掲示を通して参加しない生徒もその学びに触れている。生き物を育てることや6次産業を通じた学びは開校前から構想して

いたが、このプロジェクトがスタートしたのは「たまたま」個人研究で養蜂をしていた工芸科の島田正敏先生が赴任したことがきっかけだという。隣接幼稚園への安全面での説明や、予算、養蜂自体の困難など乗り越えるべき壁は多くあったが、蜜蜂を授業に取り入れる教員がひとりふたりと増え、ミツバチプロジェクトは今、校内外に広く認知されるようになった。

連携によるプロジェクト学習を多く担当する西野功泰先生は、「地域の人たちが生徒にスイッチを入れてくれる」という。まちに目を向けている大人との価値観に触れることで、社会や仕事に対する興味関心のスイッチが入る。そして、もっている知識を生きたものとして活用しようとする

スイッチ。さらには成功体験により生徒にもっと何かしたいという前向きな「欲」が生まれる。

キャリア教育推進部部長の蒲生崇之先生も、校内で学校生活や将来に関する意識調査を行って、より深く意義を感じるようになったという。「学業成績が良い生徒が必ずしも将来に前向きなわけではなかったのです。社会を早く体験させることで働く自分のイメージができ、将来への不安が軽減されると思っています」。「社会に近い学校」とはまた、多様な価値観をもつ人が共生し、絶えず変化するなかで共に課題を解決してゆくと、いう実社会に似た学校でもある。主体的に社会とかわる自立した市民の育成はここから始まっている。

School Data

2008年創立 / 普通科・単位制・三部制 / 生徒数1107人(男子496人・女子611人) / 進路状況(2014年度)大学・短大55人、専門学校63人、就職55人、その他55人